

巻頭エッセイ

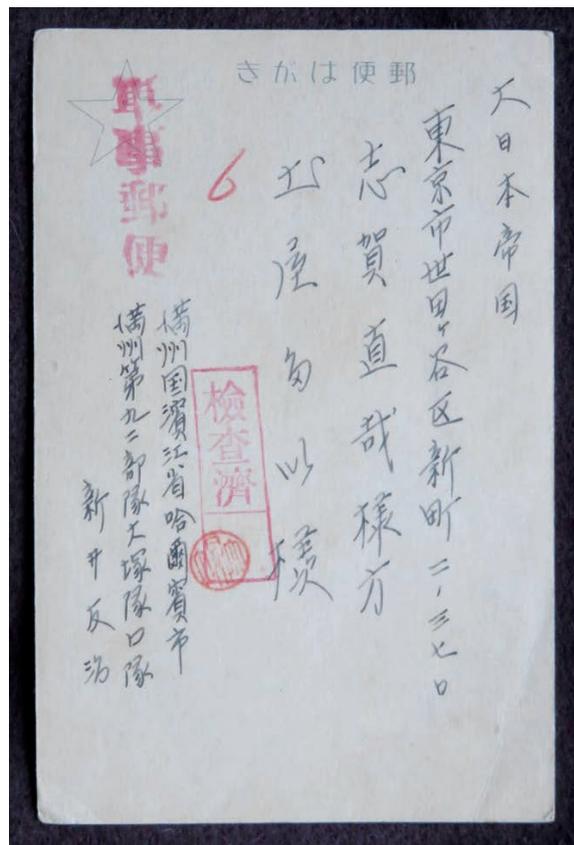
休眠の軍事郵便に光をあて、地球的舞台に初登場 ——インターネットにデビューした兵士の手紙——

新井 勝紘

① 古びたハンドバックから出てきた軍事郵便

最初に私の個人的な体験からはじめることをお許し願いたい。

私は三人兄弟の長男に生まれたこともあって、1910年代生まれの父母の晩年は、二世帯住宅を建てて同居していた。最初に母が亡くなり、それから十年後に父も亡くなったが、しばらくは手を付けることに躊躇があり、一階にあった父母の生活の場の片づけに取り組まなかった。しかし家をリフォームする機会が訪れ、私たち夫婦の年齢の差を考えると、連れ合いよりも私の方が先に足腰が弱るだろうと推測し、一階部分に私の書斎を移すことになった事情もあって、父母のいた部屋を少しずつ片づけ始めた。父も晩年は老人施設に入居していたこともあって、一階の押入れなどは、誰の手も入らなかったわけだが、私が思い切って廃棄するものと保存するものとを区別するために手を入れたところ、古びたハンドバックが出てきた。母のものだろうと



思いながら口金をひねって開けてみたところ、色あせた葉書の束がでてきたのである。検閲印が押ししてあり、軍事郵便であることは一目でわかった。誰の軍事郵便だろうと表書きをみると、差出地は「満州国濱江省哈爾濱市満州第九二部隊大塚隊口隊」で、差出人に父の名前が記されており、受取人は、母の旧姓名が記されていた。宛先は、大日本帝国のあと、その時母がいた「東京市世田ヶ谷区新町二-三七〇 志賀直哉様方」となっていたのである。

志賀直哉といえば、「城の崎にて」や「暗夜行路」などで著名な白樺派の作家で、“小説の神様”ともよばれるが、その作家の住所宛での軍事郵便であった。結婚前の母は、その頃、志賀邸に家事見習いのような形で奉公しており、武者小路実篤や網野菊などが来ると、応接室のお茶出しなどをしていたということは聞いてはいたが、その仕事場ともいえる住所に、戦場からの父からの軍事郵便が届いていたことに、まず私は衝撃をうけた。軍事郵便をめぐって、志賀直哉との会話などがなかったのかどうかも、聞いてみたかったなという思いがある。

また、父の生存中に、「俺は二度戦争にとられた」とよく言っていたことは記憶している。それも、二度とも中国であったことは知っていたが、まさか我が家から、両親が亡くなったあと、こんなかたちで軍事郵便が見つかるとは思ってもみなかった。父から戦争の話聞き出すとしたことはあったが、あまり詳しくはしゃべりたがらなかったという印象が強い。また母もそう詳しく語ったこともなかった。戦地にいた父から、まだ結婚前の母に70通ほどの軍事郵便を出し、それを母が死ぬまで大事にとっておいていたことなど、私には知る由もなかった。私が父に聞いたのは中国の南京方面にいた時期が、あの大虐殺のあとだったことがわかったので、しつこく事件のことを聞いたことはあったが、「俺が行ったのはあの事件のあとだった」という簡単な答えだけで、それ以上聞き出せなかったというのが正直なところである。満州の事も聞いたことがあるが、酷寒の地だったというような話だけだった。そんなわけで、軍事郵便のことは話題にもならなかった。父からの軍事郵便を大事に保存していたのは母なのだが、1943年に埼玉県熊谷で結婚し、戦争末期には父の仕事の関係で、東京の多摩地域に転居し、それから以後も、数回にわたって家はかわってきたが、父からの戦地の手紙は一枚も捨てずに秘かにしまっていたことを考えると、母の心情はいかばかりかと、つい考えてしまう。

父からの便りは、「万里異郷の大陸に陣中生活をしていると、何んと言っても母国の便りが何により嬉しい。便りの来ているときは全く一日の労苦を忘れてしまうほど嬉しいですよ」と、婚約者からの便りを待ち望んでいる文面が多い。ごくごく普通の兵士のいつわらざる気持ちだろう。

こんな我が家のプライベートな話を冒頭にもってきたのは、戦争に駆り出された人がある家族には、多かれ少なかれ、どんな家にもおしなべて軍事郵便が届いていたことと、受け取った側は、「命の便り」ともいふべき手紙を、そう安易に処分できない気持ちにさせていた一つの典型的な事例だったのではないかと思うからである。ということは、空襲や火災などにあわず、転居などに際しても意識的に廃棄しなければ、どの家にも多かれ少なかれ軍事郵便が残存しているのではないだろうかという思いが強い。本人が忘れてしまっている場合もあるだろうし、どこにしまったかも覚えていないこともあるだろうが、戦地からの手紙を受け取っていた時のことを思い出すと、たとえ古びてしまっている、戦地から届く間に汚れてしまっても、多少損傷があっても、ごみのような取扱い方はできなかったのではないだろうか。

2010年代も後半に入り、敗戦から70年という歳月を経過した今日、直接の戦争体験者が、次々となくなっている。そんな時、各家にほとんど忘れ去られたような状況で眠っていた軍事郵便が、今度こそ本格的廃棄される運命を迎えているのではないかと、他人事ながら心配してしまう。このまま何もしなければ、兵士の手紙はおそらく残らないだろう。

私は大学の講義（日本近代史特講など）で、軍事郵便を学生一人一人に渡して、それこそ手に取ってもらって「触る、見る、読む、考える」を実践させたが、色あせて古びた汚れた戦地からの手紙ということで、触るのを躊躇した学生がいたことを記憶している。できれば触りたくないという思いが強いのだろう。戦争体験者の孫やひ孫の世代の反応は、その程度であるわけだから、いままでなんとか保存されてきた軍事郵便も風前の灯といえるだろう。

② 日本の軍事郵便保存の現状

それでは現在の日本では、軍事郵便の保存の現状はどうなっているのだろうか。私の見聞の範囲ではあるが、まさにお寒い環境であることは指摘するまでもない。

かなり以前から軍事郵便に先駆的に注目して、会員は少ないが、熱い思いを持った会員たち

の情熱で、まず収集することに力を注いで軍事郵便をどん欲に集めてきた「軍事郵便保存会」の努力は評価されなければならない。その手紙類はある場所に、現在は集中的に保存されているが、正確な数はでていないという。積み上げられた段ボール箱には、10万通ほどは収納されているのではないかと、保存会のメンバーの発言を私は聞いたことがある。国内でこれ以上の数を所蔵するところはないだろう。ただ、未整理なものも多く、軍事郵便の内容をじっくり読みたい人向けではない。エンタイヤというジャンルにこだわっての収集といえるのだが、それでもこれだけの数を集めていただいたことは、日本の軍事郵便研究にとっては貴重な史的財産といえるだろう。

また、いくつかの自治体や、資料館や博物館などの機関、あるいはまったくの個人の努力で集められ、保存されているケースもあるにはあるが、かなり限定的なものである。県民が市民が町民が自主的に提供し、それが保存され、戦争に光が当たる夏に限定的に展示される例が多い。軍事郵便に特化して集中的に、あるいは徹底的に集めたわけではないので、枚数も限定される。日本で確認されている軍事郵便の数は、そういうものをすべて足しても、十数万枚というところだろう。戦時期には年に億の単位を数えていた軍事郵便の枚数からすれば、九牛の一毛にしかすぎない。軍事郵便を研究テーマにしている子どもがいても、我が家の例のように、ほとんどが眠った状態のままになっているのが、現状ではないだろうか。

3 ドイツには軍事郵便専門の文書館がある

それでは、同じ敗戦国であるドイツでは、兵士の手紙はどのような状況になっているのだろうか。小野寺拓也氏が「『社会知』と暴力経験——第二次大戦末期ドイツの国防軍兵士の野戦郵便から——」(『ヨーロッパ研究』11号 2012年1月)で、ドイツの状況を紹介している。小野寺氏によれば、ドイツの野戦郵便の収集保存状況は三つのパターンに分類されるという。ここで小野寺氏の研究に依拠して少し紹介してみたい。

第一のパターンは個人の収集を柱にしたコレクションである。そのうちの一つはシュトゥットガルト現代史図書館所蔵の13万5000通余り。シュテルツという人物が親戚、家族、友人らに呼びかけて収集したものが中心のコレクションで、1990年代に寄贈された。もう一つが、ケンボウスキという人物が私的に収集した手紙や日記がメインで、独自に文書館を設立したが、その後ベルリン芸術アカデミーに寄贈されたもの。手続きさえ踏めば、誰でもが閲覧可能だという。

第二のパターンが、地方の文書館の例で、郷土史編さん過程で収集された。1980年代にドイツ国内の複数の都市で着手された地域史編さんで、その都市から出征した兵士の手紙が収集され、それが結果的に地域の文書館に保存されているという。

第三のパターンが、2001年にベルリン・コミュニケーション博物館が強く意識して立ち上げたプロジェクトで網羅的に収集された例である。博物館からの呼びかけに応じた野戦郵便は、10万通に近いと言われている。そこでは書き手の個人データ(誕生日、出身地、未婚及び既婚の別、学歴、応召年、派遣地域など)も整備されているという。

ドイツにおける野戦郵便の収集保存状況は、このようになっていると小野寺氏は、紹介している。第一から第三のパターンまでの合計数については、明らかではないが、第一次世界大戦下の野戦郵便の総数については、小野寺論文で紹介されている。それによれば、約400局できた野戦郵便局(職員は1万2000人)が扱う数は、一日平均1670万通という数になり、全体では約400億通というとてつもない数字が明らかになっている。この総数からいえば、数十万通とか数百万通といっても、大した数ではないが、それでも、個人コレクションが収蔵された図書

館や文書館、地域史編さん過程の中で収集されて保存された地域文書館にプラスして、ベルリンにある博物館の大型プロジェクトとして、網羅的に収集してデータベース化した実績は大きいものがある。個人では到底不可能と思える徹底した収集の取り組みは、ドイツの野戦郵便の研究を下支えするものとなっている。それも、国内外を問わず誰でもが一定の手続きさえすれば、閲覧可能となっているという現状は、日本の軍事郵便の現状に憂慮している私から言えば、羨望以外なものでもない。

一方、日本の場合はどうなのだろうか。もちろん小野寺氏が紹介されているように、ドイツの第一や第二のパターンのような形態は、数字の二ケタ位の開きはあるが、日本にも例はある。しかし、その場合も積極的に働きかけて、あるいは軍事郵便に特化して集中的かつ網羅的に集めたわけではない。地域の近現代史、とりわけ戦争の資料に付随されて集まったものが圧倒的に多いだろう。戦争体験者の個人的な資料の中にたまたま軍事郵便が含まれていて、軍隊手帳や従軍日記などとともに寄贈、寄託される場合が多い。軍事郵便そのものに焦点をあてて、地域を網羅的に調査した例はほとんどないといっていいだろう。ましてや、ドイツの第三のパターンのように、ある博物館の大型プロジェクトとして、野戦郵便に特化して集約的に集めた例は皆無だろう。そういう機会のないまま、最初に触れたように。我が家の押入れに眠ったままの状態と同様に、いまだに誰の目にも触れられずに眠り続けている軍事郵便が、まだどれ位あるのだろうか。関係者がいなくなれば、プライベートな内容だということもあって、多くはシュレッター行きの運命が待っているだけとなる。そうでなければ、そのままゴミとなって焼却場行きである。日独の歴然たる差を思い知らされる。

生き残って戦後まで生きた兵士とともに、戦没兵士をはじめ、今もって遺骨さえ収集されずに荒野に放置されたままになっている戦死者たちの“命の便り”に、もっと光をあてなければならぬという思いが、私の中では一層強まっている。

かなりの努力を払って収集してきたドイツの場合も、400億通という数からすれば、残存する野戦郵便は微々たる数ではあるが、そうした公的な施設で、未来永劫に保存管理をする体制ができていく状況は、戦争研究への貢献も大ではあるが、戦争の記憶を次の世代まで伝えていくという意識の高さを示すものとして受け止める必要がある。戦争を繰り返してきた人類の愚かさを、戦争を直に体験してきた者が意識して伝えていくためには、どうしても必要不可欠な歴史資料として位置付けているからこそ、こうした積極的な保存活動につながっているのではないだろうか。

翻って日本の現状を見る時、日独の落差に落胆も尋常ではない。軍事郵便に関心を私が持つようになってから、そんなに時間が経過しているわけではないが、それでもかれこれ20年に近い歳月が経過している。この間いろいろな場面で、軍事郵便に接してきたが、保存面での危機的状況は改善に向かっているとはとても思えない。かつてに比べて関心は高まっているとは思いますが、そのレベルはまだまだ低い。誰かが声を大にして、保存を訴えていかなければ、休眠中の軍事郵便はそのまま朽ちて無くなってしまいう運命にある。個人の努力だけでは無理であることは承知しているが、私としてはいまだに個人的収集に執念を燃やし続けている。我が家の現状は、リビングルームを全室占領するかのようになり山積みになっている、万をこえるさまざまな兵士の手紙に囲まれて生活しているといえよう。私は時々、その中から手紙や葉書を取り出し、一通一通に込められた戦場からの兵士の声に耳を傾けることがある。そういう状況の中で、私は機会があるごとに、さまざまな場面で、最低限でも捨てないでほしいというメッセージを送り続けてきたし、現在でも継続中である。

4 インターネット公開を通しての戦争の伝承

そんな状況の中で、一昨年、突然と言っていいタイミングであったが、「100年後まで戦争の記録を残す」企画が、思わぬところから出てきた。“IT企業の巨人”と言われる「Yahoo! JAPAN」に所属する渡辺淳さんという方から、戦争の記憶・記録を100年後の世代に残すためには今何をしたらいいのかを、社の企画として考えているのだけれど、その中に軍事郵便を取り上げてみたいと思っているとの連絡が入った。私が専修大学に在職中に、私のゼミの学生とともに編集に加わって出版した『ケータイ世代が「軍事郵便」を読む』（2009年11月・専修大学出版局）を読んでおられ、軍事郵便を兵士と同じ世代の若者が読むことに、大いなる興味を抱いたといわれた。100年後まで残す戦争関係資料に軍事郵便を候補に挙げて考えているとのことで、どんな形で具体的にとりあげるかは、これから一緒に考えてほしいとのことであった。まずは軍事郵便に触れた学生に声をかけて考えましよう、Yahooの本社の会議室などを使って、ゼミOBOGの参加を得て、企画自体の説明を聞くことからスタートした。

その企画というのが、終戦70年企画として「戦争を語り継ぐ 100年後に残す」をコンセプトに、戦争体験者および戦争を知らない世代すべてに向けて、今と重ねあわせるきっかけとするべく、インターネットを使っての特設サイトをつくり、100年後まで残す戦争アーカイブを設置することだという。ユーザーは検索すれば、いつでもアクセスしてそれを見ることが出来るし、疑似体験等もできるようにするのだという。

Yahooの社内では、2015年から16年にかけて、①空襲の記憶と記録、②みんなの思い、③戦争を読む、④戦争を語るなどの企画が動き出したが、その中の一つに⑤軍事郵便がとりあげられることになったのである。そしてついに2016年8月には、「未来に残す戦争の記憶」として“戦地からの手紙”に焦点があてられ、「戦場にいる兵士が家族や知人に宛てて書いた私信「軍事郵便」が紹介されることになる。「戦いの合間に書いた手紙からは、兵士としてではない、一個人の想いが伝わってきます」とキャプションがついて、私が個人的に所蔵している、インパール作戦で戦死した川崎市の一兵士が、ビルマから川崎市の家族に宛てて書いた軍事郵便が、最初の画面に登場する。それには軍事郵便そのものの画像写真（文面が記された裏側）と、解説文がついている。これまで何度も専修大学などで展示され、ゼミ生とともに読んだ解説文は印刷物ともなって公開されたが、それでもこの軍事郵便に接触することが出来る人は限定的であった。その現状の中で、インターネットを通じてこうして公開されると、日本国内はもとより、一気に世界の舞台に初登場ということになる。誰でもが、いつでも簡単に、軍事郵便に触れることができるようになるのである。大げさにいえば、軍事郵便の世界が地球的なものになったといってもいいだろう。そして、これを最初に、これからも公開を継続していく企画でもある。

公開に当たっては、当然ながら、ご遺族の了解を得たが、この条件はネットでの軍事郵便公開の一つのハードルであった。今後、さらに継続して複数の軍事郵便を公開していくには、このハードルを越えなければならない。となると、戦後72年という歳月を考えると、筆者当人の例は数少ないと思われるが、ご遺族や関係者がわからなければ、なかなか公開にふみきることができないという現実がある。軍事郵便がどこからどういう形で、世の中に出てきたかの来歴が明らかになっていないと、ご遺族探しも無理である。こうした現状に直面してみると、一気に世界に広がると言って喜んでばかりはいられない。

一般の兵士が書いた軍事郵便には、絵葉書も多い。この絵葉書にもYahooのサイトは、注目して、「絵葉書ギャラリー」と題して、35通を公開した。これも私の所蔵のものであるが、こ

の公開に当たっても、なかなか厳しいハードルがあった。それは絵葉書として画面に登場する絵画の制作者の著作権問題である。絵葉書作成からはすでに70年を優に越える歳月が経過して、すでに絵葉書として公開されているのだからと、私は少し安易にとらえていたが、ネット公開ともなると、最低でも製作者及び関係者の了解が必要であるとのことであった。

公開する絵葉書も、絵の内容などから判断して選択したが、現実はそのすべてが公開できたわけではなかった。遺族の探索が事実上、無理という絵葉書もあったのである。結局、関係者が判明し、了解が得られたものに限定しての公開とならざるをえなかったのである。有名な画家などの場合は、探索可能の場合が多いが、そうでない場合は、関係者になかなかたどり着けない。そうすると、極端に言えば永遠に公開できないということになってしまう。戦場にいる兵士たちは、どんな絵葉書を好んだのだろうか。絵葉書の絵については、どんな画家が協力していたのか。場合によっては写真の場合もあるので、そうすると写真家にも波及する。また、どんな団体がどういう目的でどんな絵葉書を作っていたのだろうか。兵士たちがどこでどんな絵葉書を手に入っていたのだろうか、などなど軍事郵便として採用された絵葉書への関心も多面的になるが、公開が出来ないとなると、こうした興味に答えられなくなる。ハードルはさらに高いのである。

それでも、一つの壁を乗り越えて、Yahooは、公開に踏み切ったし、今後も継続していくとも言っている。

最初に触れたように、公的私的も含めてまとまって軍事郵便を保存公開している機関は、日本にはほとんどない現状を考えると、大きな進歩である。軍事郵便というジャンルにとっては超がつくほど画期的といえるだろう。このチャンスに万を超える数にもなっている私のコレクションが、こんなかたちで活かされることになったことに、大いなる喜びを感じている。このサイトがあれば、一般の人に軍事郵便の史的価値を理解してもらい絶好の場になるだろう。研究者でもあり、コレクターでもある私にとっては、望外の喜びともいえる。

5 野戦郵便隊の経験者は語っていた

もう一つ、最近入手した文献について触れておきたい。それは『元北支那派遣軍野戦郵便隊 想い出』という本である。1989年（平成元）にでき、非売品となっている。編集は野友会事務局とある。野友会とは、日中戦争がはじまって以来、逓信省から野戦郵便隊員要員として、戦場に派遣された経験をもつ人たちによって、1964年（昭和39）に発足し、「逓信魂を發揮した戦友の集い」（野友会会長・今岡墩、前掲書の序）を毎年開いている会であるが、私自身、恥ずかしいことながら、最近までこうした組織の存在を知らなかった。戦地にできた野戦郵便局の実態については、まだまだ不明なことが多く、実態解明が課題でもあったが、経験者の全国組織が存在していたとすれば、聞き取りなどが可能だったはずである。会創立25周年になる1989年の時点で、「会員相互が老境に入り、記憶も乏しくなりつつある」（前同 序）と認識し、「戦争の悲劇を再びくりかえさない為にも、次の世代に体験者は、自己の体験記を忠実に飾ることなく、綴り伝え」たいと、この記念誌が企画され、「野戦郵便隊の尊い想い出の記録こそ、郵政史上後世に伝える貴重な資料となる」と、今岡会長の序文では綴られている。

目次をみると、歴代会長、歴代事務局長などの紹介から始まって、「北支派遣軍の歌」、「野戦郵便隊の歌」、北支派遣軍野戦郵便隊所在地名表、北支派遣野戦郵便局所配置図が掲載されている。そしてメインの「想い出の記」（地区別・五十音順）では、48名（遺族も含めて）が、野戦郵便局での貴重な体験を思い出として綴っている。その一人一人の内容についての分析は、

稿を改めたいが、経験者でなければ書けないだろうという記事も見られる。

さらに軍別の「思い出の写真」、各野戦郵便隊の活動記録、従軍画家の慰問絵葉書、野戦郵便隊ゆかりの書類、報道機関ニュースなど、野戦郵便史を見るには欠かすことが出来ない文献である。また、野友会自身の歩み、全国大会開催地一覧表、野友会ニュース、特別寄稿、野友会会則、役員名簿と続き、最後に野友会会員名簿（住所、電話番号付）と、北支派遣軍野戦郵便隊・物故者名簿がついている。

48名もの体験者の「思い出の記」の読み込みと分析は未着手であるが、軍事郵便の現場での実態を明らかにする上で、貴重な文献といえる。また、この本の発行から30年近い歳月が経過している2017年現在、思い出を記した体験者のなかで生存している人は少ないと思われ、聞き取り調査は絶望的であるが、野友会のメンバーの住所等が明示されているので、関係者を尋ねることは可能である。新たな出会いと発見があるかもしれないと、淡い期待も持っているところである。

この中国派遣の野戦郵便隊員による『思い出』から6年後の1995年（平成7）、同じく野戦郵便局の体験者の前川長九郎氏（三重県津市）が、『野戦郵便隊の記録』（自費出版 伊藤印刷）を刊行され、自身の経験を柱に、野戦郵便隊の実態の記録を残した。石川県金沢で編成された第十三野戦郵便隊に所属した前川氏の任地は、濠北地域と言われる南部太平洋の西北部のニューギニア、パング海方面（チモールやモルッカ諸島など）、フロレス海方面（セレベスなど）などの小さな島々での仕事为主であった。同じ郵便隊でも前述の中国北部の野戦郵便隊とはかなり実情が異なっているので、単純な比較はできないが、戦場での郵便隊の現実を知るためには、前川著も貴重な文献である。

2007年（平成19）3月に、私は文部科学省科学研究費助成事業の一つとして認められた研究の一環として、三重県津市在住の前川長九郎氏を同研究メンバーの栗津賢太氏とともに尋ね、聞き取り調査を実施したことがあった。その記録は、専修大学の『専修史学』第43号（2007年11月）に全文掲載してあるが、前川氏から「濠北地域」と言ってどういう地域かわかるかと、きつい質問を受けたことを記憶している。その時、私はオーストラリアの北側の地域位の認識しかなかったが、実際に足を踏み入れて仕事をしていた前川氏の濠北認識は、かなり違ったものだった。

詳細なことは、聞き取り調査記録を読んでいただきたいが、戦場における野戦郵便の現実に迫るには、このような体験者の記録や記憶を、もっと収集しなければならない。

このように私が目指している軍事郵便研究の実状は、まだまだ課題が多いが、ともかく刻々と消えかかっている軍事郵便を一枚でも多く、助け、収集し、保存し、戦場に立った一人一人の兵士の視点から戦争を考える、捉えるための土台づくりを、呼びかけていきたいと思っている。その意味でも、郵政博物館の果たすべき役割は大きいのではないだろうか。

（あらい かつひろ 元専修大学文学部教授）